

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

不破健在巻
名古屋山三

昔語摘妻表紙

八百拾五番
八冊
光文堂

1.884
1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

明へ遠18
1884
-8

庫談小説
櫻史戲作

東山八景

本清

うてう



又ちま方はいしーやはらうんふれきり
たむじまにゆあーあ山常乃晴風と
うさつら河原おのこのまはあつら
江天乃暮雪もくをむむらりるまの
こやこやらしはれささささ
賀川のみされ乃とあみゆめ遠海
乃帰帆のさあさる清水寺ののこ

江戸川

二二

煙寺乃晚鐘れしきさう終る川のせきた
はるけの敷乳す平沙乃落鷹さし海
さくもさうさむの月うげち洞窟のあはれ
さく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ
夕照のほろりさく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ

香はき

六十種もろろ名もろろ法隆寺東たる道徳
紅塵枯木さうり川法華院さく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ

やはく一園城寺似ゆり不これかむり
ら金丸槃若鷹鳩祖あは梅揚まは口い梅
さくわく一ゆみさく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ
斜月白梅干鳥や法華木梅やさく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ
花のさあけふれ雪名月賀蘭ふ年梅さく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ
丹霞くれさく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ
隣家夕陽あはく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ
さく終るさうさむの月うげち洞窟のあはれ



縁さし馬さし〜
乃ち馬さし〜
し〜

右東山の家書も二曲さし〜
い〜
げら〜
あ〜
り〜

骨道風僊



○梅津嘉明

咲白ふ
梅川の川の
花さしり
うらね達の
わいそくろいぞ

為家卿

名古堂

四

回雪飛僊

○白拍子藤波幽魂

骸骨の

鬼貫

うぐい

粧あ

死見哉

食物も

い

水く

魂祭

山風雪



胚新逞慾

○不破道犬

伴左衛門

其角

のの声ぐ

石場

くら

時鳥



皮蛇足畫



蛇へびふと
かま
雉き子こ
乃の色いろ

芭蕉

名古屋卷之一

○丹波國因果娘

薄陰寒水



○六字南無右衛門

よきしらや
細首かみららふ

大井川

宗因

名古屋卷之一

天機心匠

○浮世又平重起



大津繪の
筆乃こころの
何佛
芭蕉

守節握符

○貞婦礮菜



言水
花瓜や
結とかり
琵琶の上

非風非幡

○舊家怪



水風呂の下や

紫山子れ

終の終

大草

昔話 稻妻妻 表紙 總目録

卷之一

一 遺恨草履

二 風前燈火

三 胸中機関

四 荒屋奇計

卷之二

五 厄神報恩

六 因果小蛇

七 呪咀毒鼠

八 暗夜駿馬

卷之三

九 辻堂危難

十 夢幻落葉

十一 斷絃琵琶

卷之四

名古屋卷之三

五

① 修羅大鼓 ② 靈場熱鬧 ③ 仇家恩人

卷之五 上册

④ 孤鴈榻榻 ⑤ 名畫奇特 ⑥ 雪溪非熊

⑦ 花柳鞋當

全 下册

⑧ 刀劍稻妻 ⑨ 積善餘慶

以上

通計二十回

總目錄終

昔話 稻妻表紙 卷之一

江戸 山東京傳編

遺恨の草履

今昔人皇百二代後花園院の御宇長祿年中足利義政公の時代雲州尼子の一族大和の國と領と佐木判官貞國と一人あり。兄弟二人の男子とあり。兄ハ桂之助國知といひて。今年二十五才あり。弟ハ花形九とく十二才あり。兄ハ先妻の子弟ハ後妻の御手の方といふ出生する子なり桂之助の伯父ハ藏人貞親といふ人なり是則判官貞國の弟なり由ある一万町の分地と有へ同國平群ハ別館と造りてと多おまきり。一人の娘とまうけ先づりて夫婦とあり。その息女容貌養麗なり。成長の後桂之助の内室とあり。名ハ银杏前

との夫婦中しりま〜。しどろく男子誕生あり。其名と月若とひく。
 今年七方ありぬ。其比義政公京都室町新館と營て花の御所
 と号し。兼て花車風流と好む。近仕の才も列候の子息のしりま。
 養男と撰び。召つられし。桂之助兼く養男のまゝ人のふりし。け
 撰び入て京都おめされ。右近の馬場の旅館お住室町の御所お通ひと
 勤まり。此後桂之助おとろひ。上京し。家士へ執權不破道次一子。
 不破伴左衛門重勝。長谷部雲六。番野蟹彦。藻屑二年土子泥助大上
 雁八等あり。去程小桂之助妻子の國お残し。かき其身独長く在京御所
 勤の氣勢けりり。頃日病おらふ。折く。一時家士
 等。桂之助前小集。俗殿の齋結と慰ま。支りやと評議し。けり。さ
 面家の重宝。巨勢の金岡が画。百蟹の圖。百種の蟹成り。

繪巻物の室町殿。古書画と好む。伊達達。清覽
 める。命とけり。國元より。名古屋之部左衛門が。名古屋
 山之部元春。彼巻物と携り。上り。どらら。道館お逗留して
 のり。兼て大殿申樂と好む。山之部武藝のい。古舞と字
 びく。扇。名巻の者あり。けし。口と揃。山之部
 上京。幸ひあれ。おし。御覽。彼が。御覽。
 白拍子。藤波と。年ハ十七才の。歌。吹弾の業。中
 達。類まれ。養女。古の祇王。祇女。佛。り。おと。
 とら。お。彼。山。相人。乱。俳優。と。桂之助
 い。観物。お。伴。と。桂之助

大おあぶ夫きまわく真のんるる催とべーと命トけしるる
 くるゆつひのし退れつる日彼藤波ありびの雑方と召しせ。山之即
 くりて乱舞俳優とさせ養くく酒宴とまうけく。大お真と催
 くりかくて山之即藤波うりり。種くの舞ありて後。酒釣の乱足西寺
 の胤舞無力墓無骨蚯蚓の道行あり。福廣聖の袈裟求妙高尼の
 緋縹をあどつ。兩人立合の俳優ありて笑ひと生ト。終かりて藤波
 男舞とつふ秘事と舞ねこれ昔後鳥羽院の御宇。通憲入道。藤波
 の磯の前司とつ。女小けくする舞あり。金の立鳥帽子。白水干紅の
 大口とれた太刀とあひく立舞とる。誠と此魚落雁。羞月閑花の容
 あり。ゆきと袖の鷹鳳の舞ふく。歌うく色ハ頼依の轉がく
 され。皆人感ふく。奇妙の舞妓やと。賞嘆のまをく。ハカとく。

伏時より桂之助。藤波と名とめく。病ハつく。去只ハ川の水脚
 小ああれて意の淵とかり。舞とる。不真とせく。度ハめく。色けく
 つひ小伴をさる。つとる。つとる。友波と桂之助の妻ハわく。館ハ
 引りて給仕とせ。つとる。桂之助望たり。最愛とく。色けく。これ
 妹ハ於。結とく。今年十二才ハあり。少女のありけり。これと館ハめく
 せく。友波とつとる。つとる。藤波も桂之助が養男あり。めく
 誠心とる。鴛鴦の契。浅く。つとる。桂之助のつとる。御所の勤仕ハ
 ちく。ふありぬ。これども。佞臣等ハこれと幸とる。昼夜つとる。と
 せ。お人ともありて。酒宴嬉樂ハの。つとる。旨酒ハ膳
 ふ。ち。邦曲謳歌室中ハ。か。び。と。恰も妓家。娼門の所行ハ。めく
 うた。かりける。形勢あり。山之即逗留の間。ハ。侍と見聞して。只



藤波

あまの山



佐々木桂之助
怒て家士名古屋
山三郎小命じ上
草履とらる
不破伴左門
面
打

桂之助

おろ

二 風前の燈

爰こゝ又また旅館りょくかんとあづかれば家士けし小佐せう良二りやうに八郎はちろうといふ忠臣ちゆうしん無二むにの者もの
 のりたり。若く妻さい子し瓜うりかびて尚館なうかん中ちゆうに住すまひける。山之部やまのべ白國しろくにの後のち
 へ桂之助かつのすけの才持さいぢ益えきの〜成なりゆると流ながく悲かなむ。主君しゆきんの前まへに母はは出いでく
 諫いさめゆる。虚病きよびやうとかまへぬの〜と。旅館りょくかん小妻こさいとめつらひぬ放はな仗ぢやう
 無慙むざんの御行跡ごぎやく若室町わかしむちやう御所ごしよかきこえさる。ゆ〜れた大夏だいつ御家ごけを
 か〜つこ〜ふ〜ん〜つ〜る。いねが〜く〜た波なみい〜ぬとつ〜へこれ。伊い持ぢと
 の〜とめ〜く〜るぞ〜と。何なにの憚はげもあ〜く。ちりぬひの〜と〜。た〜く〜
 諫言いさごんせ〜も。桂之助かつのすけ手ても実まことの〜。目めぬかひて悪行あくぎやうのり〜んぬ。
 二八部にぱふ熟じゆくおひひける。かく〜る〜。詞ことばを〜理ことわりと弘ひろて諫いさめす〜と。御ご家け
 入いれ〜ん〜へせん〜と〜。これ畢竟いづまじ波なみが色香いろかう小迷こまよひぬぬえ〜。

彼かれわ〜ん限かぎ〜ん〜諫いさめす〜も悪行あくぎやうや〜べ〜と根ねと〜ら〜葉はと〜
 きの〜り〜れい。折をりを〜る〜ひ波なみと殺ころす。おの〜腹はらかき〜り〜死し〜ぬ
 志こころ。科せがあれた女おんなと殺ころす。〜の〜。御家ごけぬ〜。越この范はん蠡らい
 西施せいしと呉湖ごこぬ放はなち〜る。例たとへもぬの〜と。つひ心こころぬ決き〜。よ〜折をりを
 か〜と〜ひ居ゐ〜る。一夜いちや時ときあ〜ぬ夜嵐よのあらしの烈たいげつ〜れと幸さいひ〜。身み軽かろぬ
 折をり拾ひ〜奥庭おくにわぬ入いれ樹木じゆくの茂さか〜れ所ところぬか〜れ。波なみが部屋べつゐ
 小下こさ〜瓜うり待まち居ゐ〜り。波なみぬ〜と〜露つゆ〜る〜。子こ〜る〜比ひ殿どのの前まへと
 退ちが〜。わ〜碇いかりの機嫌きげんぬ〜。〜手て燭そとくと〜。濃こ〜の小袖こそでのけ〜
 ち〜の〜。長なが〜廊架らうかと歩あ〜。二八部にぱふぬ〜と〜。氷こほりぬ〜。瓜うり
 抜ぬ〜ぬ。今いま瓜うり盛さかぬ。山吹やまぶき躑躅つとむ早はや咲さぬ。蕙うらな子こ花はなと踏ふち〜。
 中ちゆうり水みづの流なが〜。庭にわ石いしを〜。庭にわ石いしを〜。廊架らうかの手て〜の下したと

佐々木の家士

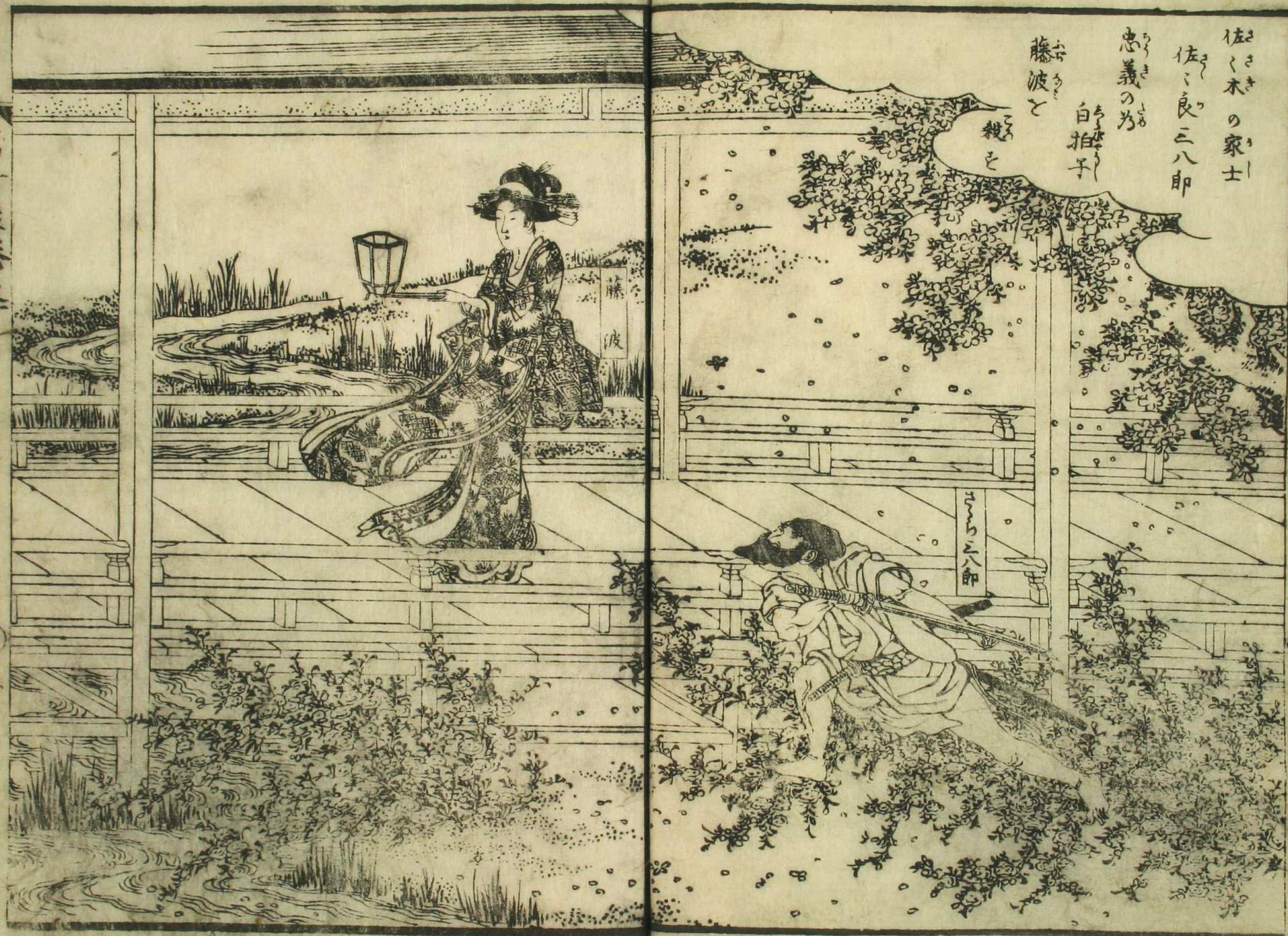
佐々良三郎

忠義の乃

白拍子

藤波と

殺と

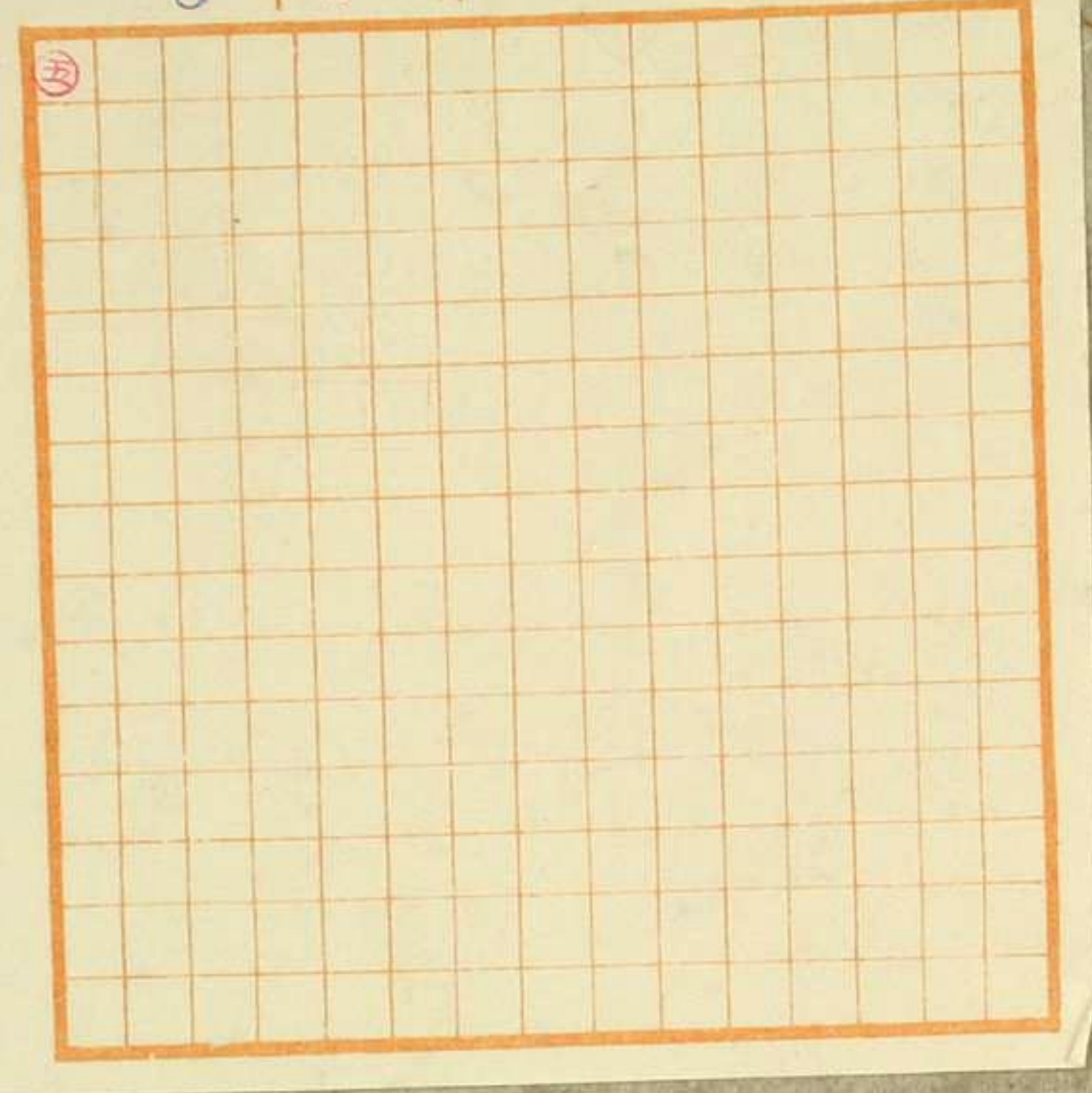


藤波

良三郎

つらひ 友波が跡をつけく。今や斬んく。とつけねく。友波の心の心もみく
 止りける。此時一命の終つた宿世の因果おやわりらん。風雨すもく
 つよ 燭燭よる庭木の櫻を吹らく。吹雪のごとく散かり。手
 燭と颯と吹けく。忽真の闇とある。嗚呼彼が命の危さもげく。風
 前の灯火あり。友波進退を失ひく。心た甲ふる。お暗裏の剣の
 光り電光石火と閃きく。驚死く。逃回んとする。此八部をとり
 かり。斬つけく。暗中あれ。目蓋ちぢく。室と斬。これと又斬
 剣の下とふりぬけく。猶逃去んと。けいごも。餘りお驚死。さうち
 けあれ足もへく。走りく。夢路お迷ふ。ごくあり。此八部の
 息とろじ。おろりと探りく。立ちまわり。めつと斬。おまりける。おぞ。友波
 振袖の袂と斬落され。危くおの避とれども。目前お剣のひるめく

5年5月



つゝひ若波が跡とつゞく。今や斬んくさつけぬふ。若波の心の心もかく
 止つてけつら。此時一命の終つた宿世の因果おやわりらん。風雨まもく
 つよく爛熳する庭木の櫻と吹らるる。吹雪のごとく散らり。手
 燭と颯と吹けしと忽真の闇とある。嗚呼彼が命の危さもげふ風
 前の灯火あり。若波進退を失ふ心たゆむる。石の暗裏の劍の
 光り電光石火と閃きたる。驚きたる。逃回るとさるぬ。この八部とぞり
 斬つつけらるる。暗中あれば目蓋ちぢむる。室と斬られし。又斬
 劍の下とさるる。猶逃去んとしけさるる。餘りお驚きたる。さるる
 けあれた足あへざりて走らるる。あつたむ。夢路も迷ふごころあり。この八部の
 息とぞし。あつらと探りて立ちまわり。めつと斬りまわりける。おぞ。若波
 振袖の袂と斬落され。危くさるる。目前の劍のひらめく

